

1. オチンドン川の話

上町と下福町の間を流れている小川をオチンドン川と言っています。この小川は、城山の絞り水といわれ、上馬場の下水溝から上町を流れ、今のニシムタ店の横を通過して旧垂水港（浮棧橋のあった近く）に注いでいます。

垂水市史料集（三）によりますと、昔、下福町に都城からの女の落人が住んでいましたので、その人をオチンタサマ（落人様）と言い、前の小川で、その人が洗い物等をしていましたので、オチンドン川（落人の川）と呼ぶようになったといわれます。

昔、都城の近くの飯野という所に平参河守^{たいらみかわのかみ}という人がいて、その娘が北原家へ嫁し、その北原家が没落しましたので、垂水へ落ちのびてきて、垂水で男の子を生みました。その子を平良弥五左衛門といって、文禄元年、朝鮮の役にも出陣したといわれます。

このオチンドン様は、なぜ垂水へおちのびて来たかという、大変美女だったので、年頃になって都城の領主の館に方向に上りました。余りにも美しいので、小中將とあだなされて、城中の若侍達の憧れの的となりました。

そして、桑山刑部小輔親元という若侍と親しくなり、とうとう小中將は懐妊しました。しかし、不義は御家の法度とあって、殺される運命にありましたので、駆け落ちすることにしました。小中將は、貧しい様子をして、夜密かに城を抜け出して、場外にいた刑部と一緒に行方をくらましました。しかし、夜道は暗く道に迷い、とうとう夜が明けてしまったので、二人は農家を訪ねそこに身を寄せることにしました。そこで同情した農家の娘が家の裏山の祠堂に二人をかくまってくれましたが、貪欲な父がきかず、わが娘を切りつけましたので、娘は二人に逃げるように知らせてくれました。

やがて追っ手が現れ、近づいてきたので刑部は娘の首を切り取って小脇に抱え、小中將を裏山へ逃しました。そして刑部は追手達と戦い、とうとう自害しました。ときに二十六歳でした。小中將は、山谷を越えて、とうとう大隅国垂水浦にたどり着き、一軒の家に救われました。そこで、小中將は、玉のような男の子を生みました。

オチンドン様は、豪族の娘で上品な器量でもありましたので、いつの間にかオチンドンサアと愛称されるようになったといわれます。